「名東図書館どくしょ会」　第７回　結果レポート

平成２７年２月21日（土）10：30－12：00　　名東図書館集会室

参加者　６名（一般）

進行　　１名（名東図書館）

テーマ本　『十三夜』　樋口一葉　/著

『澪東綺譚』　永井荷風　/著

『十三夜』

≪あらすじ≫

望まれて官吏に嫁ぐが、子供ができたとたん夫から冷たい仕打ちを受け、お関は我慢の限界で実家に戻ってくる。お関の話に共感して戻れという母親、いや、離縁すれば、子供と会えなくなる、弟もお前の夫の後ろだてがあればこそいい職につけたと諭す父親。お関は婚家へ帰ることを決意する。その帰途、乗った車夫が幼馴染の録之助。お関が結婚したことで身を崩して木賃宿に寝起きする身となっていた。別の人生を歩むふたりを十三夜の月が明るく照らすのであった。

司：では、お一人ずつ、お名前とちょっとした感想、デーマ本を５点満点で点数づけして述べてください。

山：当時の女性の心意気を感じた。そういう時代もあったんだなあと思った。単語が難しくて、古典だなあと。４点。

本：文体が今とすごく違う。古文は読んでないが、今となっては、とても新鮮に感じた。ダラダラせず、テンポもいいし、女の人の気持ちがよくわかる。うまいなあと、５点。

伊：ちょっと前にラジオで朗読していたのを聞いたが、面白かった。読むのは初めてです。モチーフとしては、恋愛をかいているので、この時代には珍しく、新しいと思った。４点。

真：よかった。５点。この文体でも、違和感なく読めた。最後まで一気に読んだ。テンポ、リズムがいいなあと。戯曲みたいで、人や情景が立ち上がってくる感じがする。内容は、当時の価値観がよくわかる。ただ、きっとお関は自分の価値観で生きていくんだなあと、思った。魅力的です。この時代の新しさを感じた。

か：最初は、ぜんぜん読めなかった。万葉集かと思った（笑い）。で、２回よんで、なれてくると引き込まれた。少女マンガ風な感じで、最後はこれで終わり？肩すかしを食ったように思った。ただ、名作としてのこっているのだから、私の読みが甘いのかなとも思う。空虚感を感じました。そのあと再生するというところを書きたかったのか、５点。

い：読みにくかったが、リズムに引き込まれた。講談師や義太夫で語るものだと思った。女の人の語りでかいてあって、その女の人がくっきり表れてきて、よかった。「たけくらべ」よりずっとよみやすくて、いい。５点。

イ：５点。録之助がいいなあ。この虚無感。おちぶれていくのは男のほう。ひかれます。夫の原田勇も可哀そう。恋愛に失敗した。お関は生きていくだろうけど。

ふ：樋口一葉は大好きなので、だいぶ昔によんだ。言葉がきれい。上下と２場あって、なんともいえず、いい。前半だけでは全然ダメで、後半があってこそという気がする。おさえておさえて、ほんとに気持ちをおさえて、コトバを交わして別れる。いいなあ。お関さんがかわいそうだけど、この再会があって、これから生きていかれると思う。希望がでてきた。別々の道だが、いきていけると思う。５点。

司：では、かなり高得点ですが、どんな切り口で話しましょう

〇：録之助が好きか嫌いか（笑い）。

〇：すきだなあ、おちぶれていく男。もう、絶対に浮かべない。虚無感にひかれます。

〇：こんな男いやだなあ（笑い）だって、周りのみんなを不幸にしたんだよ。家をつぶして一家離散、子どもも死んで、ひどい男だ。

〇：でも、この悲しさ、「何が望みで牛馬のまねをする」なんて、もう、キュンとしますね。このセリフには。

〇：しかし、録之助も、このあと、きちんと生きていくとおもいます。お関にあって、自分のことを思っていてくれたことに気づいて、そのことをささえに立ち直ると思うけど。

〇：録さんは「私もかえります」といいます。つまり、私も、かえるところに帰ります。自分の居場所に帰るという決心をお関にいうわけだから、きっと、きちんと立ち直るとおもうなあ。この言葉が重いと思う。

〇：でも、帰るところは木賃宿ですよ。ありえないなあ、だって、お関にあっても「さのみうれしき様子も見えざりき」と、たいしてうれしくないような描写がある。録之助はこのままだおちていくと思う。

〇：思いがけず、自分が思われていたことを知って、わあーうれしいなんて、その場ですぐに感情をあらわにできるもんじゃない。きっと、宿に帰ってからじわじわうれしさがこみ

あげてくるんじゃないかなあ。

○：突然のことにボー然として、あたりまえです。家に帰って録之助は自分の人生を後悔していくかも。

○：頑張ろうとなるかなあ。

○：お関は実家をでるときは絶望感だったろうけど、この２場で録之助にであって、全然変わってくると思う。

○：僕は、日常にもどるだけだから、変わらないと思う。お関が幸せになるとは思えない。

○：女のロマンが描かれているんです。

○：以前、テレビでだれが演じたかは忘れたけど、今思うとこれが原作だったんだと思い当たった。そのとき、車夫の録之助は頭巾をかむっていて、顔が全く見えないという設定だった。

○：録さんの虚無でお関が浮かび上がる、そうきたかあ、なるほどなあ。

○：私も幸せにはなれないと思う。二人とも胸に想いを秘めていきていくんだと思うなあ。

○：男性と女性のロマンがあった、ということですね。

『**墨東綺譚**』
≪あらすじ≫

小説家の大江匡は、小説の取材に、６月のある夕方、私娼窟の玉の井付近を散策する。突然夕立にあい、広げた傘にお雪がはいってくる。誘われるまま、お雪の部屋に上がる。それから、９月にはいるまで、大江はお雪のもとへ通う。お雪が「借金を返したら、おかみさんにしてくれ」といいだしたので、大江はその役は自分でないと考え別れを考える。９月下旬、お雪は病で入院する。それきり大江はお雪に会うことはなかった。

司：では、次の作品にまいりましょう。今度はこちらの方から、点数と感想をひとことずつどうぞ。

い：文章はさらっとしていて、たとえるなら木綿の文章。好ましい文章です。地理のところは東京を知らないので退屈。自由にやりたいように書いているのがおもしろかった。４点で

す。

か：明治生まれの小説家で、仰々しいのかと思ったら、すごくライトで飄々としていてびっくりした。小説？エッセイでしょうと思った。芸者とかそういう世界を扱ったものは好きじゃないけど、その気持ちをひっくりかえしてくれた。「真白だと称する壁の上に汚い種々汚点を見出すよりも、投げ捨てられた襤褸の片にも美しい縫い取りの残りを発見して喜ぶのだ」なんてところを読むと、骨を感じる。戦争への道の色がまったくない明るさ、日常のなにげない生活をかく、そこにもその人なりの気骨があると感じた。５点。

真：３点。基本、好きじゃない。（笑い）ひとりよがり、骨格のある小説か？というとそうじゃない。最後までよめることは読めた。内容は、取材の目的で、ダラダラとそこに行ってとりあげるのは、さして魅力のないお雪という女の人・・・。そういう行くという習性を描いていると思う。人間は書けている。でも、こんなことでなんで人気があったのかなあ、と思う。

伊：自分を主人公にしている。相手のお雪は正体不明。（笑い）　技巧的作品だと思った。お雪の元から帰ると、着物を着換えて、お香をたいて、本を読む・・・なんてひきょうな男（笑い）全部、自分をさらけ出せよと思う。ラストはお雪を入院させておしまい。なんて都合がいいのか、まともに女性と向き合う気がないのだ。３点。

本：時代が表れている。構成が小説として面白い。主人公がだんだんお雪にのめりこんでいくところは、きれいな恋愛だなあと思った。彼女にであって、一冊の小説が生まれた、ということだと思う。しみじみした。５点です。

山：東京に住んでいる人には面白いと思う。土地と小説の関係をすごく思った。地方にいくと、小説の登場人物が像になってたりするのをみると、おかしいなあと思う。作者ならまだわかるが、架空の人を像にするのはおかしい。永井荷風は世俗を離れた人間で、漢文に美意識をもっていたのが魅力。文化勲章をどうしてもらったのかな、反骨だったのに・・・４点。

ふ：若いころ、年配の人が多い読書会で、読まなくてもいいといわれて、それっきり、興味をもてなかった。こういう男の人はどこにでもいて、東京にいたから目立ったと思う。今日は読んでなくて、点数なしです。

イ：５点。すごく好き。この雰囲気が大好き。疑似恋愛の世界。うらやましい。私も文化勲章がなぜもらったのかが気になって半藤一利の「荷風さんの戦後」を読んだらわかった。いわゆる反骨の闘志ではなくて、徹底した個人主義の人。だから自分の意にそぐわないことはしない、権力も自分むかってくるのは避けるけど、褒美をもらえるとなると、うれしくてもらってしまう。彼のなかでは一貫しているようだ。

○：では、まず、好きですか、こんな男。（笑い）

○：いいですねえ、夫にするにはこまるかも。

○：日本は奥さんに求めることと、彼女に求めることが違う。日本は母性的なものを求めることが多い。母親の育て方が違うと思う。

○：韓国の人は賢い人とは結婚しないらしい。家のことをしてくれる人と結婚する。女の人の扱いが徹底して区別すると聞いた。

○：自分のまわりにそういう独身男性はたくさんいるので違和感はないです。

○：結婚の話がでると、身をひいていくなんて、勝手だ。

○：きちんと女の人と向き合えない男性はいると思う。荷風もそう。２回結婚して、２回離婚して、そのあとは、ずっと独身でした。

○：でも、経済的にめぐまれていないとこんな生活はできないですよ。

○：しかし、変人、警察にあやしまれるような人だ。

○：荷風は孤独死をしたとき、あの当時で預金が２４００万円あったとか・・・人気小説家だからお金がたくさんあった、親もよかったし。若いころはあの時代に海外にいけた。

○：こういう時代にこれを出したのは選ばれた人だと思う。今ならこういう人はいっぱいいるけど、この時代にはめずらしかったのか。今ならよくいる人だ。めずらしくない。

○：蚊、アルミ鍋、いもの煮つけとか、まずしいもののデティールをかいているね。おもしろいけど。

○：自分はそういう世界にいないので、おもしろく書いているのでは？高いところから見ている感じがする。

○：時代が戦争に向かって、仰々しいのに、この人はこまやかですね。

○：戦争の前に、こういう昭和の時代があった、ということがわかって、私の中で、明治から戦後へとずっとつながった気がします。

○：この作品を描いた直後の７月に日中戦争がはじまった。戦争へいく兵士がこれをもっていったそうです。

○：そんなによかったのかな。

○：今でも、荷風のこの本は人気ですよね。劇にもなるし。

○：明治生まれの大作家なのに・・・と思った。“明治生まれはエライ”という意識をくつがえしてくれた。こんな人もいたんだと。

○：ふらふらと散歩して、なじみの人がいて、ちょっと寄ってお茶のませてくれて・・・なんて、いいなあ、うらやましいなあと。（笑い）

○：雰囲気がいい。戦争をかんじさせない、明るいと思う。

○：この時代の最先端をいっていた人だと思う。

○：話をきいて、おもしろそうだと思った。さっそく読んでみたくなりました。

　一葉さんは、２４歳で死んじまって、本当に惜しい。死ぬことがわかっていたんで、最後にあんなにいい作品がかけた。
　荷風は、長生きしたけど、変わり者で淋しい人生だった。男のロマンと女のロマンを両方読めて、興味深い読書会でした。

次回　平成２７年４月１８日（土）　１０：３０～１２：００
名東図書館　集会室
テーマ本：『アメリカンスクール』　小島信夫/作